

令和元年度

# 研究紀要



神奈川県立鎌倉養護学校



## 目次

はじめに	3
肢体不自由教育部門	
小学部	
1・2年　　iPad を活用した児童観察の実践	7
3年　　見通しを持ち、楽しく取り組む「運動」	8
4年　　子どもの主体的な動きを引き出すために	9
5年　　視覚に障害のある児童に対しての、“わかる”支援の方法の確立	10
6年　　「運動」の授業における活動分析表を用いた授業改善	11
中学部	
1年　　子どもの気持ちが動く『進路』授業の研究	15
2年　　授業のユニバーサルデザイン化と合理的配慮	17
3年　　具体物を通してやり取りを増やしコミュニケーション能力を高める	19
高等部A	
高等部A　　ソーシャルコミュニケーションの授業における自立活動的視点での再整理	23
訪問教育	
在宅訪問　　一人ひとりの実態とニーズに応じたICT機器の活用による授業づくり	33
施設訪問　　集団授業において自分の役割を果たす楽しさを知り仲間を感じ認め合おう	35
知的障害教育部門	
高等部B本校	
課題学習　　授業改善につながる授業評価 「時刻と時間」の学習から	39
作業学習　　授業評価・授業改善のポイントを知るための、生徒の変化（成長）を客観的にとらえる手段	41
体力作り　　意欲向上を目指した授業プログラムの工夫	43
高等部B分教室	
政治参加教育　　自立と社会参加を目指したシラバス作りと授業改善・評価	47
あとがき	50



## はじめに

昨年度始めに、教職員の皆さんに向けて、今後の研究活動に関するメッセージを提示しました。ICTを活用した授業改善の取り組み。言うは易し、行うは難し。先生方にはそんな受け止めかたをした方も多くあったのではないかと感じています。児童生徒の学習成果を客観化すること。積み上げのできる具体的な評価の在り方を模索すること。様々なスタイルをとっている各授業の成果を活動の達成感だけに終わらせないこと。いろいろな期待を込めて投げかけたメッセージでした。

この間、新学習指導要領が幼稚部・小学部・中学部で施行され、各学校ではそこに示された新しい理念や形式や内容に沿った教育課程と評価の仕組みを構築していくかなくてはならない瀬戸際に立たされています。カリキュラムマネジメントを発揮して、これまでの教育課程の在り方、年間指導計画の在り方、時間割の在り方、授業内容の在り方、そして評価の在り方を組み替えていく作業に取りかかりながらの学校研究であったわけです。

新しい学習指導要領は、児童生徒が「何ができるようになるか」という個々の目標を明確に提示することを課しています。同時に、その新しい時代に向けて育成すべき力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力」という三つの観点から整理することを求めています。

また、特に知的代替の教育課程については、各教科の指導段階をより具体的に細分化し、「何を・どこで・いつ」学習させるのかということが具体化できるようその内容を整備しました。このことは、従来の「教科等を合わせた指導」といった授業の在り方を抜本的に切り分けなおすことを要求しています。

さらに、今回の学習指導要領では自立活動に関する取扱いがより強力になりました。そもそも教科指導とはその計画の立ち上げ方が異なる、つまり、指導内容の起点が個々の児童生徒の障害の実態にあるという自立活動の指導について重厚な別冊を設け、聴覚・視覚・知的・肢体・病弱に加えて発達障害等の各障害像についても、指導計画の立て方に関する組み立て表が提示されることになりました。

今回、本校の研究活動に求めたのは、障害による学習上・生活上の困難を克服改善し、児童生徒の学びの中身がひとつずつ積み上げられていくという本校の学校目標が目指している教育を実現するためのひとつの方略（ストラテジー）としての評価と指導の在り方をより情報化することでした。情報化することは、数値化し、数値化した状況を根拠に基づいて言語化し、それを根拠に指導計画を立てること。つまり、指導サイクルの「見える化」でした。

令和2年度には高等学校の学習指導要領が施行され、これですべての学校種において共通の理念に順じた学習指導が展開されていきます。私たち特別支援学校への期待は重大です。小中高すべての学校に自立活動の指導を行うことが明記されています。自立活動とは何か。個々の児童生徒の障害による学習上・生活上の困難を克服改善し、育成すべき知識・技能の達成を促す指導のこと、要点を言えばそうなるでしょうか。その指導の在り方を教員ひとりひとりが「見える化」できるか。今後の特別支援学校に求められる普遍的な専門性です。

校長 齋木 信也



肢體不自由教育部門

## 小学部



研究テーマ iPad を活用した児童観察の実践  
 メンバー 海下 鈴木 高岡 糸井 三森

## 1. 研究テーマの設定の理由

H30年度：児童Aは視力・聴力に重度の障害を有し、自発的な身体の動きも少なく微弱であったため、活動に対する反応を把握しづらい実態があった。教員による観察のみでは、Aに対する評価は曖昧になりがちで、就学前所属施設による評価には「笑い声が聞こえると表情が良くなった」等の主観的ともいえる記述が多く見られた。活動に対するAの反応をより客観的に評価していくために、Aの様子を動画撮影し、記録・整理していくこととした。

R元年度：全盲の児童Bは、慣れない場所・人・活動等が苦手で、不安感が高まると激しく泣き出してしまう実態があった。入学当初にはほとんど絶え間なく泣き続けている日もあり、積極的に授業に参加できないことが多かった。Bが泣いている時間を少しでも減らし、楽しく学校生活を送らせるためには、泣いてしまう要因を教員が具体的に理解する必要があると考え、Bの様子を動画撮影し、記録・整理していくこととした。

## 2. 研究方法

H30年度：児童Aの様々な活動に対する反応をiPadで撮影し、動画を解析した。

R元年度：児童Bの泣いている様子をiPadで撮影し、動画を解析した。

## 3. 研究の実際

H30年度：顔に物が触れた際に①眉間に皺をよせる表情が見られることや、至近距離で大きな音が鳴った際に全身の緊張と瞬きが見られること等が分かった。①は、呼吸が苦しくなった際にも出現しており、顔に物が触れるることは、児童Aにとって苦手なものである可能性が推し量られた。また、物が触れた身体部位の内、反応が顕著であったのは顔>上肢>下肢の順であったことから、Aの感覚は身体の下から上に向かってより過敏な可能性が示唆された。

R元年度：H31年4月には1日に20分以上泣き続けている日多かったが、R2年1月には、1日を通して泣かずに過ごすことができる日も増えてきたことが分かった。泣いた場面には、教員に①手を動かされた、②身体を揺らされた、③素材に触られた、④一日の中で慣れ親しんだ教員から関わりの浅い教員に担当が変わった等が挙げられた。一方で、手遊び歌や本児が好むポップスに合わせて①②、「ザラザラ・ツルツル」等の擬音を聞きながら③、慣れ親しんだ教員が次に誰と活動するのかを丁寧に説明してから④を行った際には、同じ内容でも泣かずに笑顔で活動できる時があることも分かってきた。これらのことから、児童Bが泣く要因は、状況把握ができないうちに活動が行われることに対する強い不安感であると推察し、Bへの指導の際は、活動内容に合った音楽や擬音を聞かせること、丁寧に状況を説明すること、次に起こることを予告すること、活動の順番をパターン化すること等が有効であると結論付けることができた。

## 4. 研究成果と今後の課題

H30年度：児童Aの苦手とする活動内容や、身体感覚のバランスをおおよそ理解することができた。今後もiPad等を活用しながら、Aの観察を深めていくとともに、Aが苦手でない活動や、快い刺激を感じられる活動を探して実践していきたい。

R元年度：全盲である児童Bが状況を把握するためには、他の児童への言葉かけと同じ情報量では不足していることが分かった。今後も、Bの状況把握を支援する言葉かけや関わり方を探り、より安心して過ごすことのできる環境づくりをしていきたい。

研究テーマ 見通しを持ち、楽しく取り組む「運動」  
 メンバー 小林 福山 向井

## 1. 研究テーマ設定の理由

昨年度の学年の研究テーマは、「義眼を着用する児童が授業に集中して活動できる授業作りの工夫」であった。見通しを持つことができ、集中できると義眼を外さずにいられるが、授業中は外してしまうことが多かった児童が義眼を外さないで参加できる授業について研究し、見通しが持てるための工夫について考えた。今年は、「見通しを持つための工夫」をキーワードにし、「運動」の授業について研究することとした。併せて肢体不自由の児童にとって「運動」ではなにをどのように取り組んでいったら良いのか、について研究することとした。

## 2. 研究方法

肢体不自由部門の「運動」では他動的な動きが多くなってしまうが、一人ひとりにあった運動とはどういうものか。運動のねらいはなにか。見通しを持って楽しい「運動」の授業をしたいという思いから研究を進めた。立案、実践、振り返り、検討というP D C Aサイクルで授業改善を行った。

## 3. 研究の実際

児童が見通し持てるような工夫として、活動の構造化をする。年間通して準備体操を行うこと、活動ごとにテーマ曲をつけて行うこと、絵カードを使うことを決めた。また児童一人ひとりの個別指導計画から、「運動」で取り組むべき項目をあげ、①色々な姿勢をとること②手を使う活動の2点を全員共通の重点項目とした。

	学 期	単 元 名	題 材	ね ら い	重 点
①	1	バスにのって	バルーン	床に足をつけて踏ん張る	①
②	2	段ボールたおし	段ボールタワー 鈴スポンジ	手や足を使って楽しく体を動かす	① ②
③	2	つなひきボウリング	ペットボトル倒し	手を使って楽しく体を動かす	②
④	2	ボール遊び	ボールとり 円陣バス	目的を持って手を動かす バスを回して楽しく体を動かす	① ②

②の単元で研究授業を行い、授業の構成、展開の仕方、教材の工夫、全体の中で個に合わせることなどについて指導助言を受け、また繰りかえしの大切さを再認識した。これらを次の単元に活かすようにした。また、学部の運動担当者会で情報交換することで題材の工夫のヒントを得ることもできた。

## 4. 研究成果と今後の課題

肢体不自由の児童が少しでも自ら体を動かせるような授業をしたいとの思いで、「運動」の授業の工夫を重ねた。単元が変わると見通しが持てずに入不安定になっていた児童も活動ごとの音楽を手掛かりに少しづつ変化に順応できるようになったり、繰り返しの活動を経て自ら手や足を動かせたりと成果をみることができた。児童が理解して活動することの大切さを理解しながらもなかなか実現できない現状があったが、一つの活動にじっくり取り組む時間をとったことで児童の理解が進み、自ら取り組むことが増えた。児童一人ひとりの理解につながるポイントが違うので、それぞれが活動に向かえるきっかけとなることを探していくことが大切であることを学んだ。また、他動的であっても受け入れられる動きを色々と経験することも大切なことであるので、今後も児童一人ひとりを良く観察して取り組んでいくことが必要であると再確認した。今後の授業作りに活かしていきたいと考える。

**研究テーマ** 客観的評価に基づいた運動の授業改善  
 ~子どもの主体的な動きを引き出すために~  
**メンバー** 黒木 佐藤 杉山 高橋 村上 山崎 柳沼

### 1. 研究テーマの設定の理由

昨年度は振り返りシートを用い、授業の振り返りを教員全員で共有することで生活の授業の改善に努めた。その成果を活かし、今年度は運動の授業において同様に取り組み、子ども一人ひとりの達成状況の把握や主体的な動きの増進に努めた。

### 2. 研究方法

- 授業後に毎回担任間で振り返りシートを回覧し、授業の振り返りを行う。
- 同じ単元を3~4回行い、毎回振り返りシートからの反省を活かして授業に取り組む。

### 3. 研究の実際

単元名	振り返りを通して分かったこと
築山滑り 滑り台 横転	滑り台ではスピード感（前庭感覚）を味わった。速いペースで笑顔が見られる子がいたり、落ちないように滑り台のふちを持って自分でスピードを調整したりする子どももいた。
バランスボード 回転盤	揺れ（前庭感覚）に身をゆだねて力を抜くことができる児童がいたり、揺れによって姿勢が崩れた時に、とっさに手のひらで体重を支えようとする児童がいたりした。また、回転盤のふちにつかまって落ちまいとしがみつくような動きが見られる児童もいた。
プール遊び	マンツーマンで縦抱っこや背面浮きなどをするうちに、縮こまっていた身体がゆるまり、身体の緊張が緩む児童がいた。フロートなどを使用すると、自分一人で水に浮くことができるくらい身体の緊張が抜ける児童もいた。集団遊びでは、円になって集まったり広がったりしていると友だちの方に注目する児童がいたり、表情が和らいだりする児童もいた。大フロートで移動をしているとスピード感やぶつかる振動を感じて、いつもはあまり動かない手足が動く児童もいた。
のりまき ロール乗り お舟はぎっちらこ おしくらまんじゅう	PTの指導の下実施した。のりまきではマットに身体を巻き付けられる感覚を喜ぶ児童が多かった。お舟では、友達と前後になって乗り、相手の方を見る児童がいた。おしくらまんじゅうでは、友達の体重を受け止めて踏ん張る児童の表情を共有できた。

### 4. 研究成果と今後の課題

子どもの主体的な動き（子ども自身の気づき）を引き出すには、子どもの感覚に入りやすいような用具と活動内容を考えること、子どもによって支援の方法を変えることが大切と分かった。毎回授業の振り返りをすることで、今まで気づかなかった子どもの動きに気づき、話し合いの中でチームとしての動きを確認し授業に対するチーム力も向上した。今後も「OneTeam」を合言葉に、担任全員で授業の振り返りを続けていくことが大切であると思った。

**研究テーマ** 視覚に障害のある児童に対しての、 “わかる” 支援の方法の確立  
**メンバー** 石井 井上 中久保 平田 府川 福田 宮嶋 矢部 和田

### 1. 研究テーマの設定の理由

クラスには視覚に難しさを抱える児童が複数在籍しており、昨年度より視覚に障害のある児童の支援についての研究を進めてきた。昨年度は、生活の授業内で研究を行い、教員の働きかけに手を伸ばした回数を数える研究を行ってきた。今年度は更に他教科の指導場面にも研究範囲を広げると共に、視覚に障害のある児童に対しての「手立て」と「合理的配慮」を探ることで、児童にとって「わかる」支援の確立を目指すことにした。

### 2. 研究方法

事前の話し合いで、授業の中で考えられる支援方法についてアイデアを練り、対象授業における支援の取り組み場面をビデオで撮影した。放課後にビデオを見ながら振り返りを行うとともに、評価表を通して改めて児童のアセスメントを行った。アセスメントをもとに新たな手立てと指導法を考えるという流れを繰り返すことで、授業改善につなげていった。

### 3. 研究の実際

前半は生活の授業場面を中心に、後半は他の教科の指導場面でも支援の手立てについて検討を行った。教育センターの指導主事からの助言も参考にしたり、iPadで撮影した授業の様子を見たりして、授業後に振り返って授業改善につなげていった。その話し合い中から次の支援へのアイデアやヒントが見つかることもあった。

授業名	支援の手立て	結果
生活	カードに具体物を挟んで活動内容を説明。 終わりの合図にカスタネットを用いる。	見通すための手掛けにはなった。
	聞くことに集中できる環境づくり。発問はなるべく簡単な言葉にし、S Tは静かに児童の反応を見る。	授業内容にもよるが、集中することができた。
	視覚以外の感覚（嗅覚、味覚、触覚など）を活用した授業づくり。単元設定、活動内容設定。	継続していくことで可能性が広がりそう。
音楽	授業内容をパペットや実物で説明して、見通しを持ちやすくする。	耳を触るという鑑賞のサインは自分の体でわかりやすかった。
運動	活動内容にあった言葉かけ（「おっとっと～」や「おしくらまんじゅう～」など）を活動中に行う。	有効であった。
朝の会	1日の予定を確認する場面で、授業のシンボルとテーマソングを用いて確認する。	わかる子にはわかりやすかったが、今後は触覚を利用する方法も模索していく予定。

### 4. 研究成果と今後の課題

視覚に障害のある児童に対しての支援の手立てと合理的配慮については取り組んだ 2 年間であったが、様々なアイデアが話し合いの中から生まれ、実際の取り組みへとつながっていった。取り組み後の話し合いの中から次のアイデアが生まれた。授業の終わりの合図を「おしまい」の言葉がけに合わせて手をたたくという方法に統一するという取り組みもその一つである。今回の研究で視覚に障害のある児童に対しての様々な支援の方法が考えられ、実際の指導場面に活かされていった。まだ検証中の部分も多い取り組みであるが、今後各教科の取り組みが学習場面だけでなく、学校生活全般に活かしていくように、日々小さな積み重ねを続けていくたい。最後に視覚に障害のある児童に対しての、 “わかる” 支援の方法は、視覚に障害のない児童にとっても “わかる” 支援だったこと分かった。このことは多様化する特別支援教育を考えていく上で、大きなヒントになるのではないだろうか。

研究テーマ 「運動」の授業における活動分析表を用いた授業改善  
 メンバー 中島 三橋 三宅

## 1. 研究テーマの設定の理由

本クラスは身体的機能や認知発達において実態が異なる集団で、「運動」の授業をどのように実践していったらよいか、「運動」の授業でどんなことを学んでほしいのか、担任間で課題として挙げられた。そこで児童の実態を把握し、指導目標を立て活動を設定する際に、一つ一つの活動の評価観点を明らかにして授業改善できるように、活動分析表を用いることにした。宮島(2016)は活動分析について、「学習活動に対し、細かく具体的な評価規準を設定し、その評価規準に沿って児童の学びや指導方法を分析し、改善に活かす」と述べている。活動分析表を活用することで、よりよい授業改善が期待できるのではないかと考え、テーマを設定した。

## 2. 研究方法

児童の実態について項目立てて把握、共有した。そしてボール運動を題材とし、個々の実態に沿って指導目標を立て、内容を考え、活動の評価規準を設定した。達成状況を毎度記入し、指導の手立てや教材、環境設定を見直して改善した。評価は①ほぼ確実にみられた・できた/○その様子がみられた/△芽生えがみられた/未記入はできなかった、と記号で表記した。

## 3. 研究の実際

### 【児童Aについて】

- 児童Aの実態：身近な言葉について理解し、教員を模倣して身体を動かせることがある。
- 児童Aの活動分析表（一部）

学習内容	活動分析	1 時	2 時	3 時	4 時	5 時
準備体操 「できるかな」	教員の動きを模倣し、頭や腕、足を動かすことができたか		△	○	◎	◎

●児童A活動分析表を用いて改善した実際：初回は絵本を用いながら体操を行っていたが、リーダーの動きに注目できていない様子であったため、①動きのカードを教員が身に着けること、②模倣しやすいよう、身体に触れる動きに変更したこと、③児童と同じ目線になるよう椅子を活用することにした。その結果、模倣して身体を動かすことが確実にできるようになった。

### 【児童Bについて】

●児童Bの実態：身体を動かそうとすると、全身の筋緊張が高まる。腕を伸ばそうとする際には、本人の意図に反して両腕とも引き込まれる。音のする方や興味のあるもの、人の動きを注視、追視することができ、簡単な因果関係を理解している。

- 児童Bの活動分析表（一部）

学習内容	活動分析	1 時	2 時	3 時
ボールころころ	差し出されたボールに気付き、触ることができたか	△	◎	◎

●児童B活動分析表を用いて改善した実際：初回に使用していた投球台が腕を伸ばしにくいつくりであったため、本人のやりたい気持ちはあったが手が届かなかった。そこで児童に合わせた投球台を用意したところ、一人でボールに手を伸ばし触ることが確実にできるようになり、達成感も得られたためか笑顔が見られた。

## 4. 研究成果と今後の課題

活動分析を行った成果としては、一つ一つの活動の評価観点を考え、共有することでどこまで達成しているのかが分かりやすく、授業改善をしていく上で有効であった。評価観点を考えることに時間を費やしたが、今後継続して取り組むことでよりスムーズに活用していくことができるのではないかと考える。

※参考文献：肢体不自由教育における子どもも主体の子どもが輝く授業づくり ジアース教育新社



肢体不自由教育部門

中学部



研究テーマ 子どもの気持ちが動く『進路』授業の研究  
 メンバー 川越、大野、緑川、富山、久和、石井

## 1. 研究テーマ設定の理由

- ・小学部にはない『進路』の授業内容は、「音楽」や「創作」等に比べて、漠然としている。  
 中学部内で『進路』について話し合うきっかけとしたいと考え、目標と内容 (①) を検討していきたい。
- ・授業改善 (②) を積み重ねて行くことで、子供の気持ちが動く場面 (③) が多い魅力ある『進路』の授業づくりを目指す。

## 2. 研究方法

- ・学部内で『進路』について考えを出し合い、各学年の授業内容をシェアする。
- ・研究対象生徒を決め、様子をビデオに録り、モチベーションシートを使って毎授業後に分析することで、授業改善を図る。
- ・あわせて、毎授業ごとに『進路』授業の方向性を確認する。

## 3. 研究の実際

① 進路の目標と内容について  =目標 太字=内容

学習指導要領中学部「職業・家庭」の第1段階「家庭生活での自分の役割や、職業の基礎的な関心、意欲を育てる」こと、小学部「生活」から「家庭生活」「役割」等の目標と、本校の「進路学習の手引き」を基に、中1の『進路』年間目標を設定。毎時間の授業後に、年度末の着地点をどこに置くのか話し合い確認しながら、目標に対応する内容づくりをした。

i) 他者の存在に気づき、かかわりを持つことで社会生活での基盤を培う。

(内容) **返事をする**：呼名されて何らかのレスポンスを返すことは、他者とかかわる社会生活の基盤と考える。また、進路先事業所が、最も身に着けてほしいこととして挨拶を挙げる事は多い。『進路』の時間に毎回取り組むことで、日常生活に広げていきたいと考えた。



呼名に対して口を動かす

ii) 身の回りの事柄に主体的に取り組む経験を通じて、社会参加のための基礎的な力を育む。

(内容) **荷物整理** (通学カバンから連絡帳などを取り出す)、**掃除** (ホウキや雑巾を操作する)：数回授業で取り組み、日常的に行なうようにした。



iii) 自分で選んで、決めて、人の役に立ち、「ありがとう」と言われる体験をする。

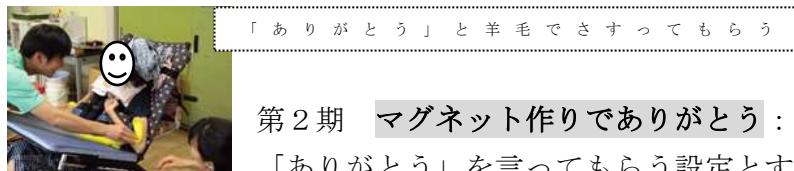
ほうきの操作

(内容) 「進路学習の手引き」によると、進路教育は、「なんで働くの？=仕事を通して人の役に立つこと」を理解することだ、とまとめられている。生徒たちにとって難しいテーマをどう伝えるか話し合い、自分が何かした→「ありがとう」と言われた→「ありがとう」って気持ちいいことだと繰り返し経験できるように内容を配列した。



床屋さんになる

第1期 **劇遊び～いろんなお仕事やってみよう**：様々な役割を演じると「ありがとう」と言われる心地よさを、羊毛の気持ち良いふわふわした感触を直接的に肌で感じるようにならした。



第2期 マグネット作りでありがとう：劇ではなく、実際に作ったもので「ありがとう」を言ってもらう設定とする。人に感謝される経験を、直接的な感触（羊毛で摩られる）から、「ありがとう」の言葉かけを受けることにステップアップさせた。保護者や身近な大人に作ったマグネットを渡して「ありがとう」と言わられる場面をスマールステップで設定した。



マークリングの作業



介助員が言うのを聞いてる

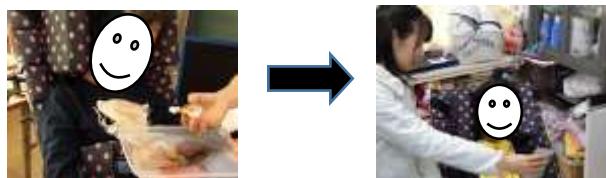
## ② 授業改善

毎授業ごとに改善点を出し、授業後は改善した点を検証した。

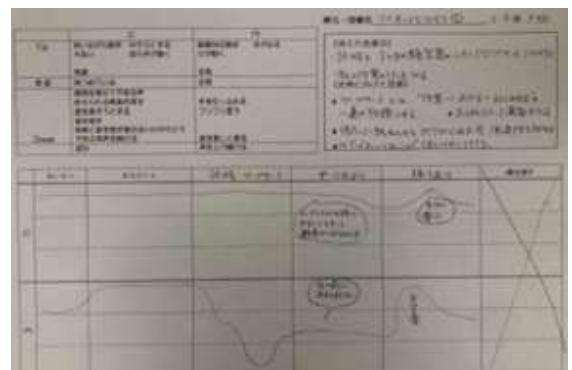
	<b>注意が向けやすい環境設定</b> 黒い衝立で壁面を覆う		予定カードを黒板に貼り、持って生徒の目の前で提示する		<b>場所の構造化</b> どこを注目したらいいのかわかりやすく動線の整理
	<b>大きな動きで注目を促す教材</b> 返事は「はい」		<b>自然と注目する教材</b> 自分たちの顔写真のペーパーサート		<b>できるところから行う</b> 拒否が強い生徒に「見ていいよ」
	<b>めあてを明確にする</b> 身近で大好きな介助員さんが困っているよ。「マグネットが欲しいわ」 ペーパーサート→ビデオ→実物の介助員		<b>選択場面を作る</b> 絵の具を色カードで選ぶ		<b>選択場面を作る</b> 絵カードで授業の感想や気持ちを伝える
			<b>待ち時間学びの時間に</b> 作業する友達の手元をテレビで映す		<b>授業の構造化</b> 返事→見る→主活動→振り返りと、いつも同じ順番で展開した。

## ③ 「子供の気持ちが動く」場面の見きわめ

ビデオ検討の視点にするために「振り返りシート」を作り、モチベーション段階表を元にグラフ化した。



つまらなそうな表情→自ら腕を動かす



## 4. 研究成果と今後の課題

教科「職業・家庭」の目標を落とし込んだ『進路』の授業を行うことができる。

- ・めあてを明確にし、生徒一人一人への手立てを工夫することで、職業教育の難しいテーマにも取り組むことができ、気持ちが動くみんなが楽しい授業になる。
- ・中学部内で話し合いを重ね、共通認識を持つことが必要である。長期的な視野が大切である。高等部との進路学習についての話し合いも持って行きたい。

**研究テーマ** 授業のユニバーサルデザイン化と合理的配慮～自立と社会参加を目指して～  
**メンバー** 小島、宮川、窪田、斎藤、比嘉

### 1. 研究テーマ設定の理由

昨年度は、研究対象生徒の唾吐き行動に焦点を当て、一日の学校生活を授業場面等時間に分けて唾吐き回数を数えて統計を取った。その結果、給食の待ち時間中に多いことが分かった為、この時間の唾吐き行為の原因分析を行った。そこで得られた成果をもとに今年度も継続して対応したことで、昨年度は平均50回あった唾吐き回数が、今年は1日平均10回（給食時は除く）と大幅に減ってきている。しかし、今もなお続く唾吐きという問題行動に対してより深い理解と対応を図ると共に、本人に寄り添った授業展開を学年だけでなく学部全体で共通理解していきたいと考えたため。

### 2. 研究方法

- ① 映像を用いて昨年度の現状報告、情報共有
- ② 唾吐き行為の記録（グラフ化、VTRを活用）
- ③ 唾吐き行為の原因分析
- ④ 原因を踏まえた教員の対応計画
- ⑤ 計画実施
- ⑥ 評価（VTRを活用した授業評価含む）
- ⑦ 計画の修正（P D C Aサイクルにより改善を重ねる）

### 3. 研究の実際

今年度は対象生徒の授業時の唾吐きに焦点を当て、どのような時に行われているのかを分析するため、毎日行われる朝の会の時間を利用して統計を取った。すると、教員の問い合わせに対して返事を待っている際や他の生徒の行動を待っている際など、待ち時間に唾を吐くことが分かった。その結果から、これは対象生徒にとって何をしている時間かが分かりにくくことが原因と考えた。そこで、すべての授業において今何をしているかが分かるようにする必要があると考えた。また、朝の会では日直の生徒に注目しているが、授業中は常にキヨロキヨロしたり、MTに対して唾を吐いたり、等落ち着きがない様子が見受けられる。しかし、授業によっては唾を吐かない日もあることから、一連の流れが決まっている朝の会とは違い、各授業ではMTが変わると授業の構成も変わり、分かりにくさがあるのではないかと考えた。

そこで、授業の一連の流れを統一するため、全授業の導入でドロップスを使用した「本時の予定」を説明する時間を設けることとした。また、今何をしているのかが視覚的に分かるよう赤枠で示しをして見通しを持たせ、時間の構造化を図った。（写真1）何度も繰り返し行うことで挨拶後にMTを見ることが増えたが、すぐに気が散ってしまい唾を吐くことがあった。そこで授業検討をしたところ、STが過剰に支援をしていることや教室整備が整っていない為に様々なところに目が行きがちなことに気づいた。そこで、MTに注目できるように音の刺激を減らし、ロッカー等刺激になる物を目隠しする等、場の構造化を図った。（写真2）すると、以前よりMTへの注目度が増すと共に、授業中の唾吐き回数は平均2回と大

幅に減った。しかし、注目時間は継続しなかったため、実際に生徒と同じ視点で教員が体験したところ、生徒の位置からホワイトボードまでの距離があり見えづらいことが分かった。そこで、生徒の目線の近くにホワイトボードを用意し、スケジュールを表示することでより分かりやすい展開を試みた。（写真3）また、見やすさを考慮し背景を黒で統一することとした。（写真4）すると、注目度の継続時間が長くなり、授業における唾吐きは殆ど見られなくなった。また、対象生徒のみならず他の生徒も本時の予定の説明が終わるまで注目している時間が増えるという結果が出た。

（写真1）



（写真2）



また、STの過剰支援を減らすという観点から給食時の対応を考えた所、給食介助時の大人的な何気ない語り掛けを無くす等環境を整える必要があると考え、共通理解を図り取り組んだ。すると、昨年度は25回あった給食時の唾吐きが平均8回にまで減った。給食時の唾吐きは、食形態や嚥下機能が原因と考えていたが、視覚や聴覚からの余計な刺激も関係していたと考える。また、このような環境設定を行うことで他の生徒も食材を注視する時間が増える等変化が見られた。

（写真3）



（写真4）



#### 4. 研究の成果と今後の課題

STの過剰支援を減らすことで唾吐き回数が減ったことから、複数の人が言葉かけをすると情報量が多くて混乱し、指示が入りにくいのではないかと考えた。これらの結果から、授業においてST等複数の言葉かけをするのではなく、基本的に一人が一度の言葉かけで伝えることが望ましいと言える。その為にも授業構成を意識し、指導案を元にMT・STの動きや言葉かけのタイミング等授業において打ち合わせを綿密に行う必要がある。

これらの取り組みは、担任一人だけではとてもできることではない。生徒が指導に戸惑いを持たないようクラスの授業だけでなく、学部の縦割り授業を含めた全授業で共通性を持たせて取り組んでいく必要がある。また、対象生徒に対する合理的な配慮が他の生徒にとっても有益な支援となることが分かったことから、学校全体で教員間の共通理解、教室環境の改善、指導体制の工夫、授業の展開方法を統一する等系統性のある指導に取り組んでいくことが重要である。

日々の指導において視覚や聴覚からの余計な刺激を減らすと共に、共感する姿勢や肯定的な言葉かけを常に心がけた授業のUD化を図っていきたい。

研究テーマ 具体物を通してやり取りを増やしコミュニケーション能力を高める  
 メンバー 玉手、内田、大滝、齋藤

### 1. 研究テーマ設定の理由

研究対象生徒は今まで自己刺激を求めることが多く、外界へ意識があまり向かなかつたので、外界へ意識を向けてほしいと考え、設定した。

### 2. 研究方法

昨年度から取り組んでいる周りに合図を送る「具体物を取り、鳴らす」を中心に取り組んでいく。具体物を受け取り相手に手渡すことを目標に指導していく。前段階として箱から具体物を取り、箱に入れるところから始めていく。様子を動画に収め、学年、学部で共有していく。

### 3. 研究の実際

研究を行っていくと具体物ではなく、箱をつかんでしまうことが多かったので、ふちが浅い箱に変更した。これにより具体物に意識が向くようになったが、握りそこねて落としてしまうことが見られるようになった。対象生徒の様子や話し合いから具体物が倒れているとつかみにくいと考え、テープで箱の中心に自立するようにするとつかめることが増えた。対象生徒の調子によるが、箱を見て具体物をつかみ、振って音を鳴らす、箱に入れるといった一連の動作を注視したまま行えることが増えてきた。



その後、指導主事からのご助言を受けて、評価基準の統一や行動観察でのアセスメントを行ったことから常同行動中には動作を行うことが難しいことが分かった。対象生徒が落ち着いて集中しやすい環境を作つてから動作を行えるよう共通理解を図り、一貫した指導を行つた。

このことから次の段階としてコミュニケーション能力の更なる向上を求め、箱から取るのではなく、人から具体物を受け取る→鳴らす→箱に入れるに一連の流れを変更した。箱から取るより人からのほうが早く注意が向き、自ら手を伸ばし受け取れることが多くみられた。これは教員だけではなく、生徒同士でも同様の結果が見られた。

P Tと連携して身体面のアセスメントを進めると、屈曲させる動きは得意だが、伸展させる動きは苦手なことが分かった。伸展動作を円滑に行うためストレッチや運動を行つて、人から具体物を受け取る→鳴らす→人へ渡すの一連の動作ができるよう外界への意識のみではなく、身体面の支援も必要なことが分かった。また、骨盤が後傾しているのも動作への困難さにつながっているのではないかと考え、姿勢作りに取り組んでいる。（図1、2、3）

上肢を伸展させる動きを引き出すため課題学習ではビックマックスイッチを使つ、触ると音が出るようにすると何度も自発的に手を伸ばすようになった。また、帰りの会での絵カードで活動の選択も繰り返し取り組むことで選択自体は難しいが、提示されたら触るといった活動の流れを理解することができた。

#### 4. 研究成果と今後の課題

##### 成果

- ・研究対象の動作を継続して行ったことで、認知面の成長が見られた。タブレット端末を注視したり画面を何度も手のひらや指先で触ったりすることやキラキラしたものやビニール袋等興味のあるものを自発的に触る機会が増えた。
- ・手指の過敏の減少により、マグを自分で持つことや手すりをつかむこと等手指を使う活動への抵抗感が減り円滑に活動できるようになった。

##### 課題

- ・外界への興味が広がってきたので、具体物での行動選択など自己発信の手段を増やしていきたい。
- ・手指の過敏の減少が見られたので、より自発的に触ったり手を伸ばしたりする興味のあるものを増やしていきたい。
- ・身体面では、上肢の曲げ伸ばし動作をスムーズに行えるようにPTやOTと連携した指導を展開していきたい。

図

図 1



図 2



図 3



肢體不自由教育部門

高等部



## 高等部

研究テーマ ソーシャルコミュニケーション（S C）の授業における自立活動的視点での再整理  
 メンバー I・IIグループ 石原、木村、菊池、佐々木、本間  
 III-1グループ 荒井、高橋、飯田、石津、金子  
 III-2グループ 井上、狩野、郡、瀬戸、小澤  
 IVグループ 小川、山藤、白井、中島、益子 学部長 吉澤

### 1. 研究テーマの設定の理由

高等部の授業ソーシャルコミュニケーション（以下S C）の教育課程上の位置づけは教科である国語、社会、職業、情報及び自立活動を合わせたものとなっている。実際には自立活動としてのねらいを中心に、それを達成するためのアプローチ方法として各教科の内容が取り扱われている。

S Cは学部内を実態別に縦割りにして行っている。毎年、教員のメンバーも変わることから、教科の授業イメージの共有が難しいという問題が指摘されていた。ただ、授業内容に関しては確立されていることもあり、学部内でのイメージを整理することでメンバーが変わってもS Cの授業が生徒の実態に合わせて行えるのではないかと考え、今年度のテーマとして設定した。

### 2. 研究方法

S Cは生徒の実態に合わせて5グループ（I・II・III-1・III-2・IV）に分かれている。授業内容によってはI・IIグループ合同で行うこともあったが、各グループの特徴をより明確化させるために5グループで研究を行った。

毎回の授業の反省や研究日を中心に各グループで時間を設定し話し合いを重ねてきた。一学期は、グループのねらいや実態の整理を行った。指導主事を含めた学部全体で共有することで、他グループの状況や実態の理解を深めてきた。二学期は、各グループの実態をより深く知るためにそれぞれのグループに所属する生徒の「受け止める力」「発信する力」をグループごとに確認し、全体で情報共有を行った。その中で、実態だけをグループ間で共有するだけではなく、「ねらい」の共有がグループの目指していく姿をより確かなものへと作り上げていくことを再確認できた。

### 3. 研究の実際

昨年度はS C各グループにおける個々のねらいや評価の観点などについて実践を通して整理を進めた。また、昨年度の今後の課題の中で「S Cのグルーピング」についての項目があり、実態の幅がある生徒をグルーピングする際の指針を明確にすることの必要性を感じた。そこで、今年度は自立活動の細分化した内容に焦点を当てる前段階として、各グループ間で研究した内容を全体で確認することで、個々の生徒の実態把握・それに基づく課題等を共有することを目指した。

### 4. 研究成果と今後の課題

各グループの特徴をまとめていくことで、そのグループの取り組み内容を整理することができた。指導案だけではなく、教員の関わりなど具体的な項目を設けたことで、他者が授業に対してもより具体的なイメージが持ちやすい資料になった。授業内容は生徒の実態に応じて変化していくものだが、次年度以降のグループ分けをする際の指針を明らかにすることことができた。

以下の資料は自立活動の視点を基にグルーピングするのに、とても有効であると考える。

## &lt; 研究成果 &gt;

## I グループ

社会への関わりを目指すグループ	
特徴：気持ち	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・円滑なコミュニケーション</li> <li>・伝わらない経験、伝わらない時に道具やツールを使って伝える方法の工夫</li> <li>・人の意見を聞きつつ自分の意見も交え、話し合いを進める</li> </ul>
場面設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関わりの少ない教員とゲームを通してコミュニケーションを取り、決められた時間の中で伝わらない経験と伝えるための工夫をする</li> <li>・IGとIIGで話し合う場面を設け、IGの生徒がリーダーシップをとって話し合いを進める</li> </ul>
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動内容を分かりやすく伝えることで、自ら理解し取り組めるようする</li> <li>・支援しすぎてできることでも教員がやらないようにする</li> <li>・記憶できない指示はメモに残すように促し、支援のし過ぎにならないようにする</li> <li>・MTが介入しすぎないようにすることで、自分でできることは自分でやる意識付けをする。自分でできることを増やす</li> </ul>
教員の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事前の支援は細かく丁寧に支援</li> <li>・活動中は距離を取り、関りを少なくする</li> </ul>
他グループとの特徴的な違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動内容を理解して、一人でも活動に取り組むことができる</li> </ul>

## 分布表

I グ ル ー プ	受けとめる力	発信する力
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の話を汲み取りながら話を広げて、円滑なコミュニケーションに繋げる。</li> <li>・他者の話に相槌や合いの手を入れながら会話に混ざることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝わりにくさなどのハンディを、ツールを使って補い、伝えたいことを相手に伝えることができる。</li> <li>・人の話を聞いて、ポイントを見つけ集団での話をまとめることができる。</li> </ul>

## 授業内容

『言葉の伝わらない経験・コミュニケーションツールを使う・相手の意見を汲む』
・自己紹介 生徒 - 生徒間、生徒 - 教員間、生徒 - 保護者間で自己紹介の練習を通して、普段関りのある人や関わりのない人とのコミュニケーション練習。
・伝言ゲーム 普段関わりの少ない人（自分の実態をあまり知らない人）と伝言ゲームを通して、言葉の伝わらない経験や伝わらなかった際にツール（iPadなど）を使って伝え方を工夫する。
・校外学習の行き先についてプレゼン 校外学習の行き先の候補を調べてIIグループの生徒へプレゼンし、生徒たちで話し合って決定する。行き先決定後は施設内での活動グループに分かれて話し合って行程を組む。

## II グループ

友達への関わりを目指すグループ	
特徴：言語	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分でできないこと、分からぬことを解決するにはどうしたらよいのか、他者と協力する力を育む</li> <li>小集団の中で自分の意見を言う、相手の考えを聞く経験を通して、より良い人間関係の形成を目指す</li> </ul>
場面設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒同士でコミュニケーションを取れるような話し合いやゲームや、生徒が自分で考えて行動する場面を多く設定する</li> <li>生徒同士で顔が見えるサークル型を取るなど、場面に応じて体形を変える</li> </ul>
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>例えば「困っている」カードを活用するなどして、生徒が自分で判断して教員に助けを求めることができる機会を予め用意しておく</li> </ul>
教員の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒と1対1で関わる場面を少なく設定する</li> <li>お面を着用するなどして、生徒が教員の顔色をうかがう機会をできるだけ少なくする</li> </ul>
前後のグループとの特徴的な違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えをまとめ、相手に伝えたり発表したりすることを、繰り返し学んだ方法を通して練習している点</li> <li>教員の関わりを少なくて、活動することができる点</li> </ul>

## 分布表

II グ ル ー プ	受けとめる力	発信する力
	<ul style="list-style-type: none"> <li>わからぬことがあってもそれを相手に伝え、コミュニケーションや行動ができるようになる。</li> <li>コミュニケーションをしている相手に意識を向ける。</li> <li>友達に意識を向け、集中して聞くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手に伝わりやすいコミュニケーション方法を身に着ける。</li> <li>慣れていない相手でも自分の気持ちを伝えることができる。</li> <li>サイン等をつかって意見や自分の思いを伝えようとすることができる。</li> </ul>

## 授業内容

○自己紹介ゲーム（1学期）：自分に合った方法（タブレット端末、紙に直筆で書く等）で自分のことを相手に伝える。担任の教員と練習した後、いろんな人（友達や学校内の教職員）に自己紹介をする。
○ハチマキゲーム（2学期）：目隠しをした状態でつけたハチマキの色をお互いに教え合うゲーム。教員は見守り、生徒同士でコミュニケーションを取る。
○話し合い（2～3学期）：見たい映像（2～3択）を決める、校外学習で行きたい場所を決める等。教員は見守り、生徒同士でコミュニケーションをする。
授業のはじめには、活動内容を提示して見通しを持つことができるようにした。また、活動内容はできるだけ生徒同士で行えるものとし、活動自体の数もできるだけ少なくし、話し合う時間を長く設けた。教員は基本的に見守り、生徒同士での関わりを最優先とした。そのような中で、「助けを求めたり発信したりすることも大切である」ことも学ぶことができるために、「困っていますカード」を生徒が自分で判断して使えるように準備した。

## III-1 グループ

対教員との関わりを通して、友達を意識することを目指すグループ	
特徴：状況理解	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>見通しをもって、主体的に動いたり気持ちを表出したりする</li> <li>活動のルールを理解、又は意識する</li> <li>生徒同士のコミュニケーション</li> </ul>
場面設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業の展開を年間を通して同じ流れで行う</li> <li>MT、場の切り替えで見通しを持ちやすくする</li> </ul>
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>切り替えをしやすい場面の展開</li> <li>話し合い、役割分担など友達同士の関わりとなる場面の設定</li> </ul>
教員の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の自発的な動き、表出を待ってから支援に入る</li> </ul>
前後のグループとの特徴的な違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>間に教員を介することで、友達を意識しやすくなったり関わることができる</li> </ul>

## 分布表

I グ ル ー プ	受けとめる力	発信する力
	<ul style="list-style-type: none"> <li>簡単な言語での指示を理解し、活動に参加することができる。</li> <li>簡単な言語での指示を理解することができる。気分に左右されず、行動できることを目指す。</li> <li>何をしているときか気づき、話している人に注目したり、手を動かしたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>興味のある人に声をかけたり、近づいたりする。友だちに自ら適切な関わりができるを目指す。</li> <li>友だちに対してサインや言葉を使って簡単な意思を表出できることを目指す。</li> <li>いろんな人からの関わりに、視線や声を使って思いを伝えることをを目指す。</li> </ul>

## 授業内容

SC III - 1 グループの生徒は、他者への関心があつたり、相手の求めていることに気づくことはできるが、関心のある他者が限定的であつたり、求めていることはわかつてもその場ですぐに実行することが難しかつたりする生徒が多い。また、流れがわかることや、役割があることで自分から活動できる生徒が多い。このことから、役割を持たせその中で生徒同士が関わりを持てるようにし、授業は、「1. うた」「2. ダンス」「3. ゲーム」「4. リラックス」の流れで毎回行うことで流れがわかり、自分から活動に参加できるようにしている。

## III-2 グループ

教員との関わりの中で、場面に合わせた活動を目指すグループ	
特徴：状況理解	
ねらい	・やることや因果関係を理解することで、自発的に活動に取り組む
場面設定	・同じ環境の中で繰り返すことで、活動に見通しを持たせる
配慮事項	・他の人の活動を見る環境も整えて、活動への理解へと繋げていく
教員の関わり	・手を出しすぎず、働きかけながらも待つことで生徒の動きを引き出す
前後のグループとの特徴的な違い	・自分で気づき、自分で行動することができる

## 分布表

I グ ル ー ブ	受けとめる力	発信する力
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな活動を通して、いろんな人からの要求も受け入れ行動することを目指す。</li> <li>・関わる人を選ばずに、活動に取り組むことをを目指す。</li> <li>・やりたいこと以外でも場面に応じた行動をとることを目指す。</li> <li>・やるべきことに集中する時間を増やす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員からの要求に対して何らかの行動をすることを目指す。</li> <li>・人の動きを予測して物に手を伸ばす場面を増やす。</li> <li>・興味のあるものに手や身体を伸ばし、手に取ることを目指す。</li> <li>・嬉しいときには両手を挙げたり、声を出したりして表現する。</li> </ul>

## 授業内容

【因果関係を理解し、活動に取り組む】
太鼓叩き [音楽が止まると太鼓を鳴らすチャンスを得る → 道具を使い太鼓を鳴らす] [友達が行っていることを見ながら自分の順番に備える] [自ら太鼓に手を伸ばすと鳴らすチャンスを得る → 道具を使い太鼓を鳴らす]
ボウリング [投球台にあるボールを手で転がすことにより、ピンを倒す]
【好きなものを活用し、自らの手を伸ばし、積極的な動きを引き出す活動】
お気に入りのものを使った活動 [お気に入りのものにヒモを結び、手元に引くことができるかどうかをみる] [それぞれのねらいに合わせて、物を遠めに置いたり、箱に入れたり注目しやすい方法を同時に探った]
実態に合わせて、興味のある活動を増やす

## IVグループ

社会への関わりを目指すグループ											
特徴：気持ち											
目標…自分らしく受けとめる、感じる→表出する→「好き嫌い」「繰り返し」 大目標…表出する自信につなげる 進路先でも共有できる意志表出の整理（教員側から）											
中目標…「好き嫌い」「もう一度」「受け入れる（無）」「選択」「期待感」etc 音・光・香り・聴覚・触覚などに対しての刺激 同じ流れでの繰り返しによる見通し、慣れ、自信 感覚活動、リトミックなどの活動をテーマに変えて取り組む MTに注目できるよう、STは過度な支援をしない（声を出さない、接触なし） 「いつもの流れ」に変化を加えての表出も「ねらい」の一つ											
<table border="1"> <tr> <td>ねらい</td><td> <ul style="list-style-type: none"> <li>様々なアプローチに対して、受け入れることができる</li> <li>興味関心を広げていくことができる</li> </ul> </td></tr> <tr> <td>場面設定</td><td> <ul style="list-style-type: none"> <li>MTと生徒のやり取りを中心に行う</li> </ul> </td></tr> <tr> <td>配慮事項</td><td> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒一人一人の表出に注目して進めていく</li> <li>授業に取り組むための準備（気持ち、体調）をすることができる</li> </ul> </td></tr> <tr> <td>教員の関わり</td><td> <ul style="list-style-type: none"> <li>STはなるべく介入しないようにする</li> </ul> </td></tr> <tr> <td>前後のグループとの特徴的な違い</td><td> <ul style="list-style-type: none"> <li>MTが生徒と関わるときにSTが間に入らない</li> <li>外からの刺激を受け入れ、自分なりの表現で表出をしていく</li> </ul> </td></tr> </table>		ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々なアプローチに対して、受け入れることができる</li> <li>興味関心を広げていくことができる</li> </ul>	場面設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>MTと生徒のやり取りを中心に行う</li> </ul>	配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒一人一人の表出に注目して進めていく</li> <li>授業に取り組むための準備（気持ち、体調）をすることができる</li> </ul>	教員の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>STはなるべく介入しないようにする</li> </ul>	前後のグループとの特徴的な違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>MTが生徒と関わるときにSTが間に入らない</li> <li>外からの刺激を受け入れ、自分なりの表現で表出をしていく</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々なアプローチに対して、受け入れることができる</li> <li>興味関心を広げていくことができる</li> </ul>										
場面設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>MTと生徒のやり取りを中心に行う</li> </ul>										
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒一人一人の表出に注目して進めていく</li> <li>授業に取り組むための準備（気持ち、体調）をすることができる</li> </ul>										
教員の関わり	<ul style="list-style-type: none"> <li>STはなるべく介入しないようにする</li> </ul>										
前後のグループとの特徴的な違い	<ul style="list-style-type: none"> <li>MTが生徒と関わるときにSTが間に入らない</li> <li>外からの刺激を受け入れ、自分なりの表現で表出をしていく</li> </ul>										

## 分布表

I グ ル ー プ	受けとめる力	発信する力
	<ul style="list-style-type: none"> <li>音や物に対して、穏やかに聴くことができる。</li> <li>呼名や音に対して、声を出さずに聴くことができる。</li> <li>声、音、光や人の移動、物の近づきに対して、視線を送ることができる。</li> <li>音、光、匂いの方向へ顔や視線を向けることができる。</li> <li>一点を見つめて耳を傾けることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SP02の数値や表情で気持ちを表現することができる。</li> <li>光の選択を口のモグモグや視線で選ぶことができる。</li> <li>トーンチャイム等、心地よい音を視線で追うことができる。</li> <li>返事や期待感を声で表現することができることがある。</li> <li>目を見開いて視線を向ける。表情の変化（まばたきや視線、口の動き）、体で快・不快を表現することができる。</li> </ul>

## 授業内容

① 沈黙 始まりの鐘…授業の始まりを意識できるように『沈黙』の時間を作る。その後の鐘
② 始まりの歌…始まりを告げる『歌』 始まりに意識を向ける
③ 呼名…個々の名前を呼び、表出や気持ちの準備
④ 音を浴びよう…聴覚からの刺激を受け入れ、快不快の表出
⑤ 感覚、感触活動…視覚、嗅覚、触覚、聴覚からの刺激を感じ、興味関心の拡大、気持ちの表出
⑥ リトミック活動…ダンスなどの動きのある活動 リズムなどの変化に気持ちの表出
⑦ おしまいの歌 沈黙…終わりを告げる『歌』 終わりを意識するとともに次回への期待感

## &lt;今後の課題&gt;

上記のように各グループ間で研究した内容を確認することで、個々の生徒の実態把握・それに基づく課題等を共有することができた。グループ毎のまとめを学部全体で共有できたことで、次年度以降にメンバーが変わることは避けられないが、高等部が今まで取り組んできたSCの授業理解への手助けをする資料になるものができる。また、学部を越えてソーシャルコミュニケーションの理解を深め、自立活動との関連についての参考資料になることを願っている。

今後は、今回できたものを土台に授業をより生徒の実態に合わせたものにしていくために、作成したことで満足せず活用させていく必要がある。また、学部の他の縦割り授業である教科の整理も進めていくことが望ましい。他の授業の整理が進むと学部としての特徴がより明確になり、メンバーが変わっても高等部で学んでいく内容が洗練されていくのではないかと考えている。

## &lt;グループごとの補足解説&gt;

I グループは言語でのコミュニケーションが可能な生徒のグループである。しかし障害によって、音声言語が不明瞭であったり、経験の不足から状況に合わせた柔軟なコミュニケーションや自己発信に課題がある生徒たちである。ねらいとしては自立活動「コミュニケーション」における「コミュニケーション手段の選択と活用」「状況に応じたコミュニケーション」が中心になっている。自分に合った補助伝達手段をICT機器などのツールの活用をして獲得することや、自己の考えをしっかり相手に伝えること、相手の話を聞いて自分の考えを交えて話を進めることができるようなることを目指している。このグループでは自立活動におけるねらいと同時に教科としての「国語」「社会」「職業」「情報」などの内容も重要な位置付けとなっている。

II グループは言語によるやりとりができる生徒であり、自立活動「コミュニケーション」においては「言語の形成と活用」「コミュニケーション手段の選択と活用」が目標の中心となっているグループである。しかし日常的な会話ではコミュニケーションがとれているようでも、言葉の意味が理解できないまま会話を行っていたり、伝えたいことがあってうまく伝えることが難しかったり、会話が自分中心の一方的なものになってしまいがちな実態があるグループである。

従って自分に合った方法で、伝えたいことを相手に伝えたり、相手の話をよく聞いて会話をすすめたりすることができるようになることがこのグループの目標となっている。そのためには自立活動の「人間関係の形成」における「他者の意図や感情の理解」「自己の理解と行動の調整」とともに、言語理解を促進するという「国語」の要素も重要な狙いとなっている。自己紹介の内容を考えるという自己の考えをまとめる作業や見たい映像や外出したい場所について話し合って決める学習を通して、自己発信の力や他者を意識・理解しての会話ができるようになることを目指している。

III-1 グループの生徒の特徴は具体物が無くても、言語のみの提示で活動が理解できるところである。表出においても身振りや表情、様々なサインや音声言語を用いて行う生徒たちであり、二語文程度の言語理解は可能であると考えられる。自立活動「コミュニケーション」のうち「言語の形成と活用」がねらいの中心となるグループである。活動への見通しも良好であるが、参加にあたってはスムーズに参加できる環境設定が必要な生徒が多いことも特徴である。対大人（教員）とのやり取りは自発的、積極的に行え、かつ良好であるが、課題が同じ友達との関わりは難しい。このグループのねらいは「コミュニケーション」に加え「人間関係の形成」の中の「他者との関わりの基礎」「他者の意図や感情の理解」にあり、理解できる言語を増やすとともに、他者との関わりかたの基礎を学ぶことが授業の柱となっている。

授業は毎回同じ展開で行われ、扱う歌やダンス、ゲームの内容を変えながら行なっている。授業の内容は言語による提示が中心で、それに対する生徒の表出を教員が仲介して他の生徒との関わりへと結びつけている。授業においてはより他の生徒との関わりを深めるため生徒個々の集団における役割を設定したり、小グループによるゲームを展開したり工夫を重ねている。

III-2 グループは具体物を見てその機能やそれを使ってのこれから活動が分かつたり、判断できたりする生徒のグループである。自立活動「コミュニケーション」のうち「言語の受容と表出」がねらいの中心となり。具体物から言語を介しての理解へと向かうような指導を目指している。毎回繰り返す活動を通して、具体物と言語の提示を工夫し、言語による理解の割合を拡大していくことを目指している。また、このグループの目標は「人間関係の形成」のうち「他者とのかかわりの基礎」の割合が「コミュニケーション」上のねらいよりも大きいことが特徴である。

他者を意識したり、他者からの要求を受け入れたり、ルール理解の基礎となる、働きかけとそれに起因する結果（因果関係）の理解を進めるとともに、自発的な働きかけを他者へ行う力を促進することが目標となっている。具体的には具体物を提示し、その機能や活動を理解し、自分からそれに対して「行いたい」という意思の表出を期待して、生徒の興味関心の高いであろうと考えられる、楽しいゲームや音楽、楽器を使った活動で授業を構成している。

IV グループは自立活動「コミュニケーション」のうち「コミュニケーションの基礎的能力」をねらいとする生徒のグループである。外界からの様々な刺激に対してそれを受容する力、また反応・発信する力を高めていくことを目標としている。具体的には生徒に対して、刺激を整理・限定して与えることで、その刺激に対しての集中力を高め、受容する力、及び受容期器官の発達を促すことをねらって授業を構成している。音声の刺激、光や目前で何かが動く刺激、香りや匂いの刺激、何かが触れる感触、自分の身体が動く感覚などの刺激を季節に合わせた題材・ストーリーの中で、一定の流れに沿って展開している。一定の流れで毎回の授業を行うことで、見通しを持つことや、これから始まる活動に期待を持って参加するようになることも期待している。

IV グループの生徒の中には「コミュニケーション」のうち「言語と受容と表出」により近いねらいが設定される生徒も存在し、特に呼名に対しての反応を促す関わりでは、長期間繰り返す中で、自身の名前に対しての応答がはっきり現れてきたケースも見られる。しかしながら、IV グループの生徒の授業での自立活動上のねらいは、「コミュニケーション」よりも、より「環境の把握」のうちの「保有する感覚の活用」にあると言える。

肢體不自由教育部門

## 訪問教育



**研究テーマ** 一人ひとりの実態に応じた社会参加の理解と実践  
 一人ひとりの実態とニーズに応じた ICT 機器の活用による授業づくり  
**メンバー** 朝倉 白川 七海

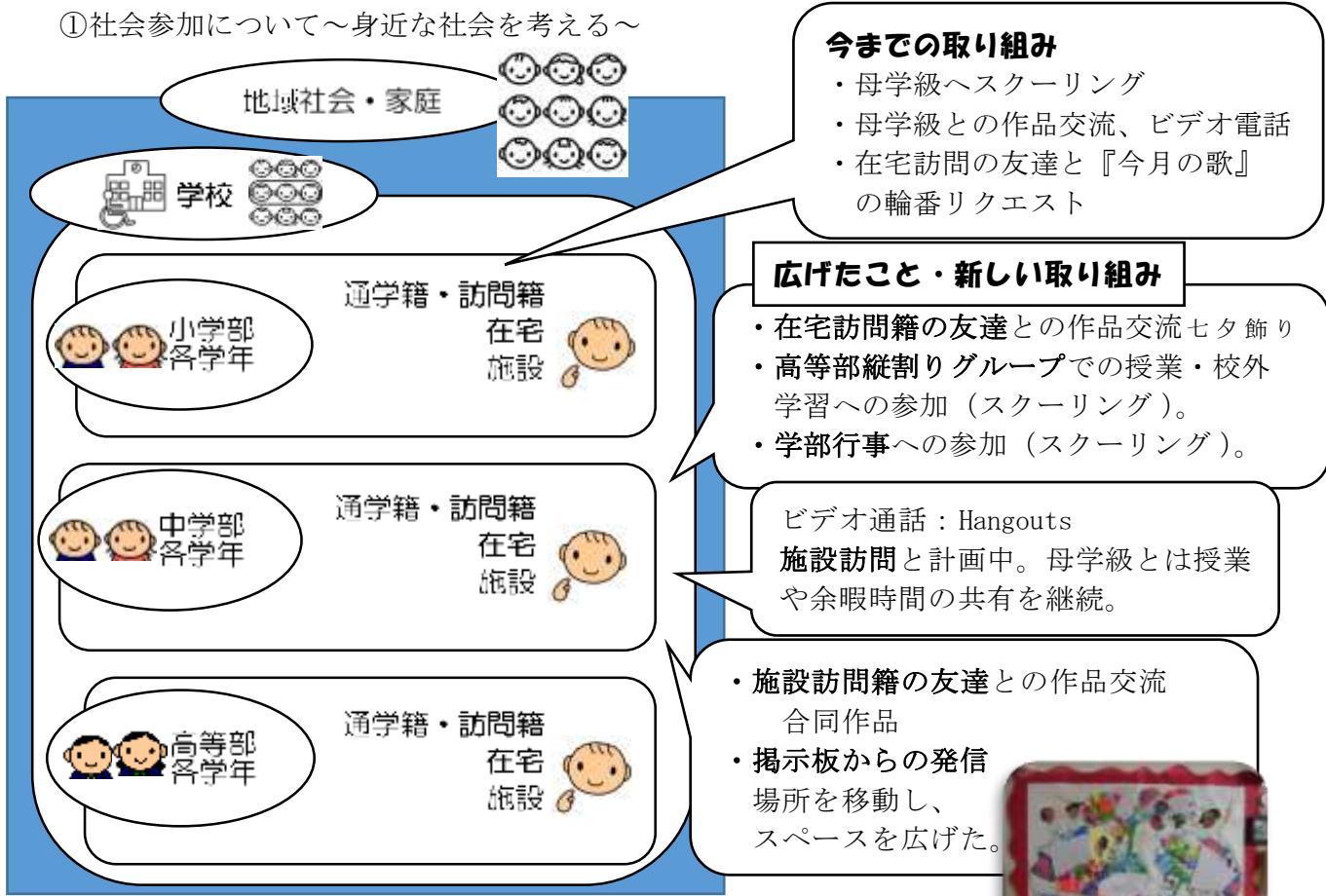
## 1. 研究テーマの設定の理由

H30 年度は、在宅訪問籍で学習する各児童生徒の社会参加の一つとして母学級との関わりに焦点を当てた。主に「Hangouts」のビデオ通話機能を活用し、母学級とのつながりを日々の学習に取り入れて授業を展開した。朝の会や音楽、余暇活動に母学級と共に取り組み、交流を行った。今年度は個々の社会参加をより広げることをねらいにし、更なる一歩を考えて実践することにした。また、昨年重点を置いた母学級との関わりについては、交流からさらに関係性を深めることをねらい、ビデオ通話機能利用の時間が特別な時間ではなく身近なものになり、通常のクラスの一員として過ごせるように活用をすすめたいと思いこのテーマを設定した。

## 2. 研究方法

- ・各児童生徒本人及び保護者の願いと母学級の実態を考慮しながら、個々に応じた社会参加の実践をすすめる。
- ・各児童生徒のニーズや身体の動きなどの実態を把握し、本人及び保護者の願いと合わせて ICT の活用をすすめる。
- ・訪問担当 3 名で、学部学年、各家庭に関する情報交換を密に取り合いながら、一人ひとりの学習内容を計画して実践する。

## 3. 研究の実際



## ② ICT 機器の活用について

ICT 機器		活用方法	学年の友達と・学部の友達と・施設訪問の友達と・関わるみんなとつながる!	
iPad	ビデオ機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視聴を活用し、家庭での授業を展開した。</li> <li>・訪問の歌、母学級の毎月の歌などを録画。</li> <li>・母学級の授業、校外行事…内容、教材を録画。</li> <li>・高等部政治の学習…模擬政権放送の録画。</li> <li>・式典、鎌養祭、演奏会など行事に関する録画。</li> </ul>		
	YouTube	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今月の歌や季節行事に応じた音楽など視聴。</li> <li>・好きなアーチストなどのライブ鑑賞。</li> </ul> <p>※映像を別のiPadで撮影して持参。又は、衛生面により本人宅の物を使用した。</p>		
	カメラ機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スイッチを併用し生徒が撮影。</li> <li>・作業時の手元など、本人の視線が届かない角度や方向を中継しながら学習をすすめた。</li> </ul>		
	Hangouts	<ul style="list-style-type: none"> <li>・母学級との朝の会、音楽の授業、余暇活動をビデオ通話でつなげた。</li> <li>・今年度は、教室内の定点で固定して撮影し、登校時に近い雰囲気と目線での取り組み。</li> </ul>		
スピーカー	手のひらスピーカー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・iPadやCDプレイヤーとつなげて使用。</li> <li>・音色や音の強弱に応じて振動する。身体に触れて響かせ、メロディーや音を届けた。</li> <li>・曲や臨場感ある季節の音（波の音など）鑑賞。</li> </ul>	生徒宅の物	
	・アンプセット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・CDプレイヤーとつなげて使用。</li> <li>・マッサージ等のBGM、世界や季節の音楽鑑賞。</li> </ul>		
	・Bluetooth ・有線	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ウォーターダンシングスピーカ…音に合わせ水と光が変化。個々の感覚で音の雰囲気を鑑賞。</li> </ul>		
ポータブルCDプレイヤー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習活動に応じたBGMなど、音楽教材の再生。</li> </ul>		生徒宅の物	
デジタルカメラ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員が、生徒の学習記録や教材などを撮影。</li> </ul>			
パソコン+（マウス機能） 視線入力装置トビー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目の使い方の学習…動いているのに視線が合うことで反応し、アクションが起きるゲーム。</li> </ul>			
遠隔カメラ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・室内から、自宅の庭に作った水田の稲の観察。</li> </ul>			
ポータブルDVDプレイヤー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・余暇活動で好きなアーチストのDVD鑑賞。</li> </ul>		生徒宅の物	
iPad :検索アプリ Yahoo! など	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習テーマに関する調べ学習。</li> </ul>			

## 4. 研究成果と今後の課題

在宅で過ごし、外出は通院が多い子どもたちにとって、ICT機器の活用は情報を得たり自分から発信したりする社会とのつながりに大きな価値があった。特にiPadの活用は、児童生徒の一番身近な集団社会「学校」との連携に大きな役割を担っていた。視覚・聴覚・振動から得る情報に対し、心拍数の変化や表情の和らぎ、視線を向けるなどの表出が見られ、経験の積み重ねや刺激への興味、理解につながった。気持ちの活性化による表情の様子について保護者からの好評を聞くこともあった。1台で複数の機能を持つiPadは、教材を持参する教員にとっては荷物の軽減につながりありがたい機器であった。1台に様々な教材を取り込むため、ストレージ不足になることが度々あるが、貸出用との併用で授業を展開した。Hangoutsは県のシステムを使用するため繋がらないことがあるが、有効な活動のため継続を望む。

**研究テーマ** 自立と社会参加を目指した、連続性のある授業作り、授業改善

～集団授業（朝の会）において自分の役割を果たす楽しさを知り仲間を感じ認め合おう～

**メンバー** 小さき花の園 小学部4名、高等部3名 計7名

## 1. 研究テーマの設定の理由

### （1）現状と課題

小さき花の園では現在、小学4年生から高校2年生までの7名（男性5、女性2）の入所者が施設訪問教育を受けながら生活をしている。授業形態は個別授業と集団授業を組み合わせて行っているが、4名の人工呼吸器の児童・生徒のうち3名の集団授業については、処置や移動の際に看護師の手を必要とする等の理由から、週に2回の参加に留まっている。また、1名については体調面での移動のリスクを考慮して、ベッドサイドだけでの授業となっている。人工呼吸器をつけていない他の3名の児童・生徒は毎日集団授業に参加している。気管切開をしていない児童・生徒は2名で、うち1名が年間を通して教員のみの引率で本校へのスクーリングに行き、本校の児童・生徒との集団授業も経験できている。

入所生活では医療・生活支援者以外の他者との関わりが薄い傾向にあり、学校としては1人でも多くの人と触れ合える環境を作り、同じ課題を誰とでも取り組めたり、教員側が多角的な視点から接したりすることが、児童・生徒にとって経験の幅を広げていけると信じて、担当を決めず学習の支援をしている。よって、個別教育計画はもちろん、日々の情報交換が連続性のある授業作りや、授業改善にとって非常に重要であると認識している。

医療面での制限だけでなく、施設の体制によっても集団学習を受ける機会が減らざるをえないところをどのように補っていくのか、いかに自分らしく社会参加していくのかを支援することが長期的な課題でもある。

### （2）研究テーマについて

環境があまり変わらない児童・生徒にとって、朝の会や集団授業（感覚・運動・お話・音楽など）で、普段過ごしている部屋を出て、教員やクラスメイトと過ごせる時間は1日の中で1～2時間の貴重な時間である。この時間は、仲間の中で自分の存在を確かめたり、笑いの中で気分転換をしたりできる社会参加の時間であり、その時間は楽しいものでなくてはならないと考え、よりよい授業作りのために「朝の会」の研究を進めることにした。

## 2. 研究の方法

朝の会は、輪番で日直を指名し、ビッグスイッチを使って会を進行してもらった。その他の役割（係）は、日付や曜日をホワイトボードに貼る係、天気をホワイトボードに貼る係、日めくりカレンダーをちぎる係、呼名係、合同の内容を知らせる係、ラジカセスイッチ係、プリント係、毎月の歌の絵を描く係とし、個々の実態に合わせて年単位で教員が決めたものに取り組んできた。日々の情報交換や共通認識のもとに、必要な支援をしながらできるだけ自分で取り組むようにした。

## 3. 研究の実際

集団授業は、朝の会（11：00～11：20）、合同授業（11：20～11：50）

の2つが連続で行われている。本研究では、朝の会に焦点を絞って自分の役割を果たす楽しさを知り、仲間を感じ、認めあうためには、どのように教材や姿勢を工夫したらよいかを考えた。病棟奥の1部屋に集まりスタートするが、途中で吸引や薬の注入などの処置が入ることも多い。

呼吸器の児童生徒は日に1名（水曜のみ2名）しか集団授業に参加できないため、毎日4名（水曜日は5名）で授業を行った。視覚優位な児童生徒が多いため、絵や手話を取り入れたり、進行表のボードを1つ終わるごとに外したりして、見通しを持って取り組めるように工夫した。出席確認の時には、その場に来ていない児童・生徒の様子について写真を見せながら伝え、仲間意識を持てるようにした。また、時間割を工夫し、部屋の移動ができない1人の生徒について、ベッドサイドで同じ部屋の児童・生徒と、ミニ朝の会やミニ合同授業ができるようにし、仲間を意識して活動する経験を重ねた。

お互いが見えやすいように車いすの向きを変えたり、スムーズに進行しない場面も仲間を意識できる時間と捉えたりして、「待つ」時間を大切にした取り組みをしてきた。仲間の様子を静かに見守ったり、声を出して応援したりする場面も見られはじめ、役割を果たしている仲間を感じることができていた。

#### 4. 研究成果と課題

ベッドサイドでしか授業ができない生徒にとって新たに取り組んだミニ朝の会やミニ合同では、1人での朝の会よりも賑やかな雰囲気が作れることもあり、自発的な体の動きがみられ、仲間を意識して楽しんで取り組んでいるように思えた。部屋同士をつなぐハングアウトも検討したが、インターネット環境を施設側の回線に頼っているため、様々な問題がおきて授業に支障がでたり、両者を結ぶ教員の人数的な問題もあったりして実現は難しかった。

また、集団授業に参加していても教員だけで車椅子移動ができない人工呼吸器の児童生徒もいるため、係活動の人選にも制限があったが、個々の得意なことを生かす役割分担ができていたのではないかと考える。特に毎日参加できる3名の児童にとっては、連続性のある係活動に見通しを持てるこもあり、自分の役割を理解して笑顔で楽しそうに取り組む場面が見られた。

今後はより医療度が高くなり集団授業に出られない児童・生徒の受け入れが増えたり、進行性疾患の児童の機能低下も見られ始めたりしているので、PPSスイッチ（わずかな動きにセンサーが反応する機器）等のICT機器をどのように授業で活用し、自立（できる喜びを感じる）の支援の一助となるのかを活用しながら検討していく必要がある。

そして小さき花の園の教員としての役目は、より良い支援をチームで検討したり、老人ホームや高校との交流、見学会の受け入れ、支援室前の掲示板での情報発信を継続したりして、小さき花の園の児童・生徒を知ってもらい、社会参加を広げていくことなのではないかと考える。

知的障害教育部門

高等部 本校



研究テーマ 授業改善につながる授業評価  
 メンバー 宇賀神 内田 小林 近藤 佐藤悠 高橋 橋本久 橋爪

## 1. 研究テーマの設定の理由

養護学校では生徒アンケートの「できた」「わかった」という主観的な評価だけを授業改善につなげることは難しい。そのため単元の導入期にプレテストを行い、学習後に同じテストを行って結果を比べることで学習成果を客観的に比較することが「授業改善につながる授業評価」となるのではと考えてこのテーマを設定した。

## 2. 研究方法

今回の課題グループの研究では「時刻と時間」の学習を対象として取り上げた。

「時刻と時間」の学習をするときのプレテスト（アセスメント）の内容としてどのようなものが適切かを、情報を集めて検討し、1年目の研究についてはその支援方法が適切であるかどうかを実際に1名の生徒に試すことで検証した。2年目には対象を広げてプレテスト（アセスメント）を行い、支援方法としての「ヒントカード」の有効性を検証した。

## 3. 研究の実際

### 事前に考えたアセスメントの内容

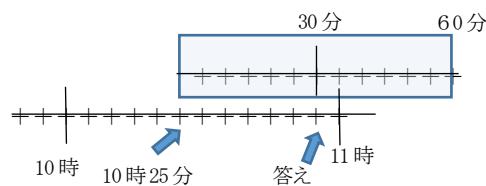
- 「時刻がわかる」
- ① 同じ文字盤でも短針と長針の意味することが違うことを理解すること
  - ② 短針と長針を見てそれにだいたい何時を指しているのかと位置のイメージを持つことができる
  - ③ 5とびや10とびの数え方に慣れること
- 「時間の計算がわかる」
- ① 時間の単位がわかり換算ができる
  - ② ○○分前、○○分後、午前、午後、24時間といった言葉の意味がわかる
  - ③ 単位を換算しながら繰り上がり、繰り下がりといった操作ができる

### 研究の1年目

1名の生徒Aさんを対象に「時刻と時間」の小テストをして現状の理解度を確認した後に、「時間のものさし」の使い方を説明し、その後再び小テストを行った。

時間のものさしとは 例題 10時25分から30分後

- ① 時間のものさしと同じ間隔の数直線を書く。②始まる時間を垂直線に記入。③時間のものさしの目盛で「○分後」「○分前」の箇所にしるしを付けて確認。④時間のものさしを数直線にあてて、その長さで時間の経過がわかる。



### 研究の2年目

1年目のAさんの成果を基に、時計の学習の中でつまずきやすいポイントを整理し、プレテスト（アセスメント）を作成した。対象者を広げて15名の生徒でプレテストを行い、その結果をグループ分けした。それぞれのグループに対応した「ヒントカード」を活用した学習を積み重ねた。

		プレテスト（アセスメント）の段階表
時 刻 を 読 む 問 題	短 針	①短針の示す位置が数字にぴったりの時刻 ②短針の文字盤抜け数字 ③短針の間の時刻（中途半端な針の位置） ④文字盤に数字が抜けていたり、書いてない時計の時刻
	長 針	①長針の1分の単位まで記入された時計盤から分の時刻を読む ②長針の5分ごとに単位が記入された時計盤から分の時刻を読む（ぴったりの時刻） ③長針の5分ごとに単位の数字が抜けた時計盤から分の時刻を読む ④5分ごとの分の単位の数字を書いた時計盤からぴったりの数字を示していない長針を読む ⑤数字の書いていない時計盤から長針の分を読む（ぴったりの位置） ⑥数字の書いていない時計盤から長針の分を読む（中途半端な位置）
	時 間 の 計 算 問 題	①単位の換算が必要でない正時・正午を超えない計算 ②単位の換算が必要でない、正時・正午をまたがない時間の求差 ③正時を超える時間の計算・単位の換算あり ④正時・正午を超えて且つ分の単位の換算が必要 ⑤正時・正午を超えて「午前」「午後」の意味が分かり且つ分の単位の換算が必要 ⑥「午前」「午後」の意味が分かり、単位を換算して繰り下がりが必要になる求差の時間

#### 4. 研究成果と今後の課題

1年目の研究対象であるAさんは「時間のものさし」を使うことによって、時間の増加による単位の換算ができるようになった。「時間のものさし」は時刻が読めて、かつ時間の単位換算が必要のない計算ができる生徒が、「正時」「正午」を越える時間の換算を必要とする計算をするときに有効な手立てだと考えられる。

2年目の研究対象である15名の生徒についてはそれぞれの理解の段階ごとに「ヒントカード」を作成した。

##### 時間の計算 ②のヒントカード（単位の換算が必要でない、正時・正午をまたがない時間の求差）

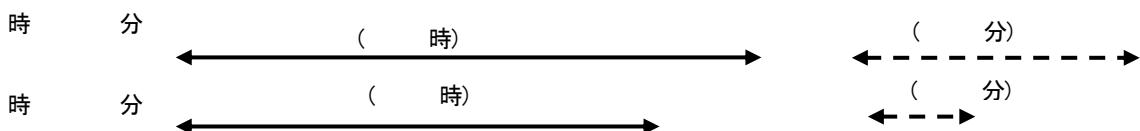
手順① 問題文の数字を見比べて、大きい数字を上に書き、小さい数字を下に書く。

時 分  
時 分

手順② 時間を実線で書く。分を点線で書く。



手順③ 線の上に数字を記入して、上の数から下の数を引く。点線も同じ。



##### 時間の計算 ③のヒントカード（正時を超える時間の計算・単位の換算あり） ○時30分から30分後は何時でしょう

手順① 分と分とを足す

手順② 分と分とを足して「60」を超えたたら、(60分) + ○分と書く

例 80分 → (60分) + 20分

手順③ (60分)に線を引いて、その上に「1時間」を書く

例

1時間  
(60分) + 20分

**研究テーマ** 授業評価・授業改善のポイントを知るための、生徒の変化（成長）を客観的にとらえる手段

**メンバー** 新船 岡田 梶谷 坂本 佐藤健 高田 竹内 橋本亜 平野 山田 渡邊

## 1. 研究テーマの設定の理由

作業学習の授業改善に取り組むにあたり、生徒の実態や変化（成長）を客観的な指標に基づいて継続的に評価し視覚的にとらえることが全校研究テーマ「自立と社会参加を目指した連続性のある授業づくり・授業改善」につながると考え、生徒の実態や変化（成長）を客観的に捉える手段を検討することをテーマに設定した。

## 2. 研究方法

客観的な評価としてICT機器を活用することを踏まえ、生徒・教員による授業評価の手段についてグループで話し合った結果、県立座間養護学校有馬分教室における研究を参考に、本校高等部B部門の生徒の実態に合った“評価シート”（=評価表+レーダーチャート）を作成することとなった。まず、自立と社会参加に向けて育てたい力について話し合い、評価項目、評価基準等を検討し、評価表を試作した。さらに、評価結果を視覚的にとらえやすくするため、評価表の点数をレーダーチャートに反映させた。グループのメンバーがそれぞれ生徒の変化を観察し、評価シートの試用と検討、改良を重ねた。また評価シートの活用効果を検証し、今後の活用方法についても検討した。

## 3. 研究の実際

評価シートの改良に向けて、試用と検討を重ね、評価項目や評価基準の内容、表現等の変更、レーダーチャートの修正、自由記述欄の追加等を行ってきた。評価項目の一つに挙げていた“自立”については、他の7項目から総合的に判断されるものであるとの考えに至り、他の7項目すべてができる状態を、作業学習における自立度100%となるようにした。評価シートによる評価を複数回行う中で、教員自身が生徒の変化に気付くことがあったため、その変化の要因を探り、今後の指導に活かすために、教材や支援の手立て等を自由記述欄に記載しておくこととした。試用と検証の結果、授業回数、行事、実習等を考慮して、評価回数は5月、11月、2月の3回が適正であろうとまとめた。作業内容が変わることがあるため、この3回を単純に比較はできないが、生徒の得手不得手を見る点において有効であると考える。

## 4. 研究成果と今後の課題

2年間続けてきた評価シートの試用と改良を通して、どのような効果があったのか、グループのメンバーにアンケート調査を行った結果、生徒の実態を客観的にとらえることができ、指導のねらいや授業改善のポイントを意識して指導を行うことができるようになった一方、教員間の情報交換、授業改善についての共通認識、生徒による授業評価については不十分であるという意見が多くかった。また、せっかく作成し改良してきた評価シートなので、もっと活用できる方法があるとよいとの意見もあった。

アンケートの結果を踏まえ、活用方法について話し合った。複数の教員が共通認識をもってそれぞれの生徒について関わることが重要であることから、評価シートのデジタルデータをサーバー上に保管し、教員が閲覧したり記入したりできるようにすることや、話し合いの場を設け、印刷したものを持ち寄って検討することは有効であると考える。また、一部の生徒に対しては、本人が評価シートを使うことで自己理解を深め、目標を設定することにも有効であろう。とはいえ、各教員がそれなりの効果、手応えを実感できなければ、学部全体の教員が継続して評価シートを活用していくことは難しい。生徒の実態と変化の把握の面での効果や授業改善の手がかりとなりうることを実証していくながら、さらに評価シートを改良していく必要がある。

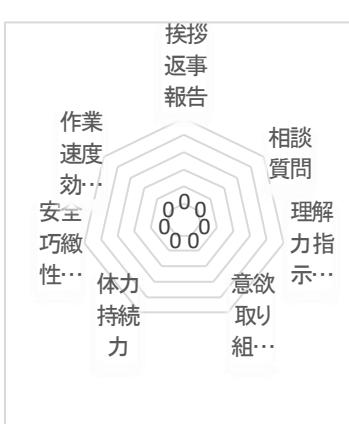
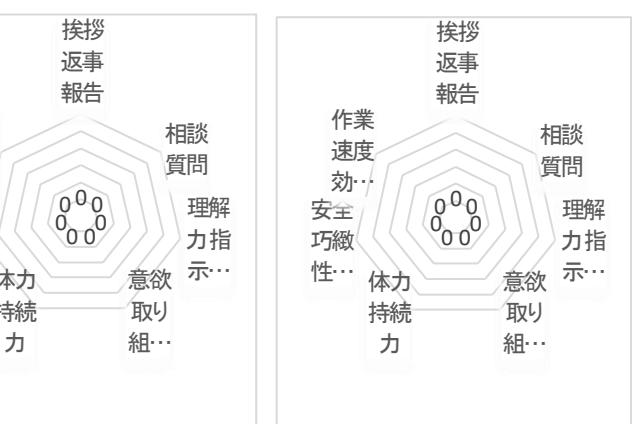
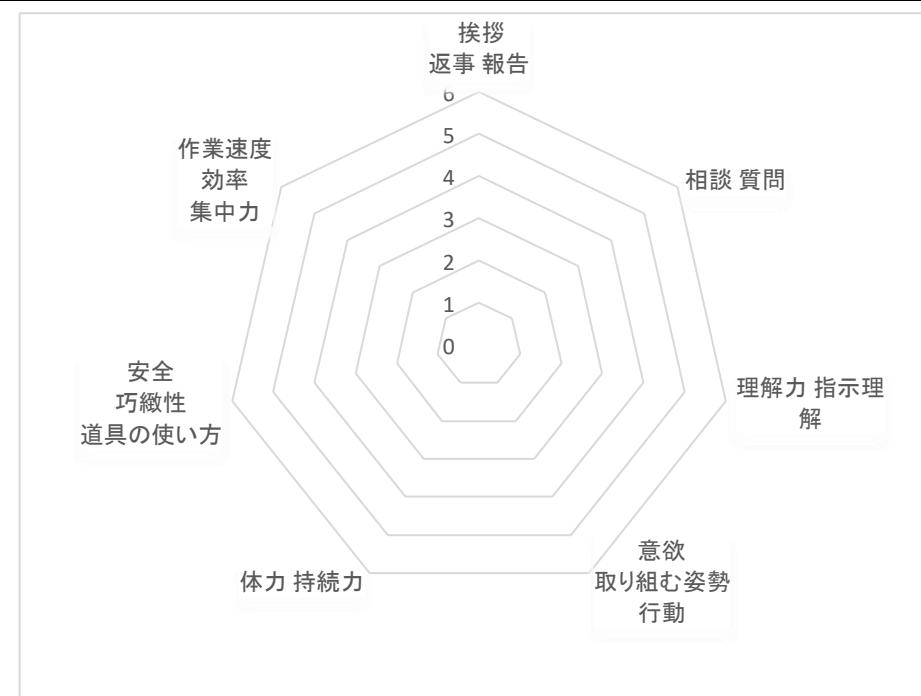
<このシートを活用するにあたっての確認事項>

※ 気分にむらがあり、体調、状態がすぐれない場合は、その生徒に対してこの評価は行わない。または、調子が良い時の評価とは別のものとして考える。

高B研究 作業グループ 資料1

班	年組	氏名	得点		気づき、アプローチの改善点、反応等									
			5月	11月	2月									
No.	観点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	5月	11月	2月	評価者	評価者	評価者	
1	挨拶返事	状況に合わせた挨拶返事ができる	教員から挨拶をした時、唱和の時にできる。	気分によってしない時がある	限られた場面でできる。呼名されたときは、返事ができる。	促されたらできる	挨拶・返事をしない							
2	報告相談質問	適時、状況に合わせて行うことができる	自分で誤った判断をすることがあるが、質問もできる	困っていたり、間違えたまま行っていたりすることがあり、時々促しが必要	限られた場面で、パターン化されたものはできる	自分からは行わないが、促されたらできる	相談や質問はしない							
3	理解力指示理解	全体指示で自主的に指示通り取り組むことができる	全体指示と手順書をもとに指示通り取り組むことができる	言葉をかけられると、指示されたことに取り組むことができる	個別の説明と視覚的支援や自助具があれば取り組むことができる	視覚的支援があれば取り組めるが、教員の常時見守りが必要	教員と一緒に取り組むことが必要							
4	意欲取り組む姿勢行動	全体指示で、自ら取り組むことができる	全体指示を聞きながらも、周囲に合わせて行動にうつす	個別に言葉をかけられると取り組む	教員が一緒だと取り組む	取り組まない時間がある	取り組もうとしない							
5	体力持続力	朝礼から終礼まで取り組むことができる	作業時間中は取り組むことができる	1コマ程度取り組むことができる	適宜休憩が必要である	部分的に取り組める	取り組めない							
6	安全巧緻性道具の使い方	安全に配慮し、正しく扱い続ける	正しく扱えるが、扱い方が不安定	道具の扱い方が不安定	常に見守りが必要	教員と一緒に扱う	道具を使うことができない							
7	作業速度効率集中力	難しい作業が適量こなすことができる	簡単な作業なら適量こなせる	繰り返すことで、簡単な作業を適量こなせる	時々支援が必要で、ゆっくり進める	常に教員と一緒に、ゆっくり行う	ほとんど進まない							

氏名	0		
上記の7項目から試算される自立度(%)	5月	11月	2月
	0	0	0



5月

11月

2月

0

0

0

**研究テーマ** 意欲向上を目指した授業プログラムの工夫

**メンバー** 菅原 寺沢 草柳 齋藤 徳永 小関 嶋 天野 青柳 木村

## 1. 研究テーマの設定の理由

高等部B部門では、週3回の頻度で「体力作り」の授業を設定している。授業の展開としては、晴天時には、準備・整理運動と15分間のランニングを行い、雨天時には、室内で筋力トレーニングやストレッチ等の運動に取り組んでいる。授業の中核をなす、15分間走については、生徒の取り組みへの意欲の差が非常に大きく、15分間で走る距離や周回数の向上を目標とし、意欲を高められる生徒は多いとは言えない状況にあったが、校内研究体力作りグループでは、H30年度は、一部の生徒を対象として、晴天時の15分間のランニングの部分に焦点を当て、取り組みの方法に工夫を加え、効果を検証した。

今年度は、より多くの生徒の意欲向上を図る手立てについての工夫を進めていきたいと考え、授業内の活動のうち、「準備運動」の部分に焦点を当て取り組みを進めた。

## 2. 研究方法

これまで、高等部B部門の「体力作り」の授業では、長年にわたって「ラジオ体操第一（以下、ラジオ体操）」に取り組んできた。「ラジオ体操」は、有酸素運動・筋力トレーニング・ストレッチ運動・バランス運動の要素が含まれており、適切に取り組めば、総合的な運動ができる優れた全身運動であると言える。しかしながら、「ラジオ体操」の効果を十分に引き出すための指導（正しい動作の習得と維持・使用する筋肉へ意識を向ける習慣づけ・適切な呼吸のタイミングの学習や判断等）は難しい。今回の研究グループでの話し合いでは、現状の本校での取り組みの中で、その十分な運動効果を保障することは困難であるとの見解に至り、より効果的に運動効果を保障し、かつ意欲の高まりに繋げられる教材の工夫を検討していくこととなった。具体策を練る話し合いの中で、生徒の日ごろの様子を観察していると、音楽に合わせて身体を動かすことについて、高い意欲を示す場面が多いという意見で一致し、多くの生徒が知っており、かつ軽快な楽曲を選び、エクササイズを取り入れることで意欲と運動量の向上が期待できると考え、取り組みを進めた。

まず、考えられたことは、「ラジオ体操」の要素を活かしながら工夫を施すという点である。授業中盤の15分間走で、有酸素運動の機会は保障できるため、筋力トレーニング・ストレッチ運動・バランス運動の動作を主に取り入れることとした。また、楽曲の選定にも工夫が必要であることが話し合われた。生徒たちにとって必要と考えられた「気分の高揚」をどう実現するかをポイントとし、これまでの体育での学習や日常生活での様子から、アップテンポな楽曲を用い、ダンスの雰囲気を取り入れること、また、「ラジオ体操」と同じく一定のわかりやすいリズムが感じられることを重視し、楽曲の選定をした。

このようにして、考え、実践に至ったものが「アメリカ体操」である。以下に、内容を示す。

**内容** **DA PUMP 「U. S. A.」** にあわせて、身体を動かす。

前奏や間奏：サイドステップ→下半身や体幹の筋力を高める

①足の蹴り出し→バランス運動を主としてリズムよく片足を蹴り出す

②ランジ（大きく前に1歩踏み出す）→主に下半身の筋力を高める

③前屈→脚・腰周辺のストレッチ

④体側ストレッチ→上半身・肩のストレッチ

⑤つま先タッチストレッチ（ひねり動作）→上半身・下半身のストレッチ

⑥上半身ねじりストレッチ→上半身のストレッチ

⑦曲のサビ部分：左右交互に片足ジャンプ（原曲の振り付け）→片足ジャンプとバランス運動

※もう一度①～⑦繰り返し

### 3. 研究の実際

研究グループの教員内容の検討を進めた後、9月～12月にかけ、3か月間の試行を行った。初回と2回目の授業では、動作ごとに解説を加えながら、練習を行った。それ以降はじめの1か月半については、教員が手本を示しながら、曲に合わせた体操が成立するよう指導を行い、後半の一か月半は、各学年の生徒が集団の前に出て、リードをしながら展開した。3か月間の施行を経てから、生徒にアンケート調査（2学期末）を行い意欲の高まりについて調べた。

### 4. 研究成果と今後の課題

アンケートの質問項目と結果は以下の通りである。

アンケート対象者84名（長期欠席や授業不参加生徒含む） 有効回答数64

①	15分間走を 走るときに がんばれたのは どちらですか。	ラジオ体操	26.5 %
		アメリカ体操	70.3 %
②	身体が あたたまつた（走りやすくなつた）のは どちらの体操 でしたか。	ラジオ体操	20.0 %
		アメリカ体操	75.0 %
③	「アメリカ体操」を つづけて いきたいですか。	ラジオ体操	12.5 %
		アメリカ体操	82.8 %

アンケートの結果からは、ラジオ体操と比較し、15分間走に臨む気分の高まりと身体の動かしやすさについてそれぞれ7割以上の生徒が「アメリカ体操」での効果の高まりを実感している。また、取り組みの開始から3か月と実施期間が短いことも影響していると考えられるが、現時点では8割以上の生徒が、今後も継続していきたいと回答しており「ラジオ体操」と比較して「アメリカ体操」への取り組みへの意欲が高いことが示されている。

「アメリカ体操」への取り組みが、15分間走での周回数向上につながったという検証は難しいが、ラジオ体操と比較し、運動強度が上がり、多くの生徒の心拍数が上がる様子や、授業の雰囲気が活発になる等の効果は実感できた。また、ラジオ体操では身体に手を添えるなどの介助を行わなければ取り組みが難しかった生徒や、動作の修正のための言葉かけや指示（手本）を多く必要としていた生徒が、自分の力で取り組める幅が広がるといった利点も確認できた。

これらの結果から、今回の「準備運動」への工夫は、多くの生徒の意欲に繋げることができ、目的を達成することができたと考えている。

2年間の授業改善を目指した取り組みから、昨年度(H30年度)・今年度とそれぞれの取り組みから成果を得ることができたが、今回の研究では、改めて「体力作り」の授業時間の設定等に関わる意見交換も行われた。現在、授業の中核をなす15分間走については、生徒の取り組みへの意欲の差が非常に大きく、15分間で走る距離や周回数の向上を目標として意欲を高められる生徒は多くはないという状況にある点について、グループ内で意見が交わされる場面が多くあった。実際に、目標設定について生徒と相談しながら、励まし、意欲を高めようと指導にあたっているが、明確に効果（手応え）を感じることはさほど多くはない。先に示したアンケート調査において、「体力作り」の授業が好きかという質問項目を設定したところ、全体のうち約3割の生徒が「好きではない」・「どちらともいえない」に回答している。また、自由記述欄では「毎回7周を走って大変」「好きな音楽を聴きながら走ってみたい」「楽しいことを考えながら元気に走りたい」などの意見も見られた。週に3回行われる「体力づくり」の授業を通じて、走る（ジョギングする）ことで、爽快感・達成感を感じ、活動自体に楽しさを見出す（運動を楽しむ）態度や力を育てることも今後の課題であり、短時間で記録（距離や周回数）を追い求めることに価値を置かざるを得ない現行の授業展開から、ゆったりと余裕をもち、もう少し長い時間ジョギングをし、爽快感や達成感を得られる機会を設定することなども今後の取り組みの工夫として考えられる。

知的障害教育部門

## 高等部 分教室



**研究テーマ** 自立と社会参加を目指したシラバス作りと授業改善・評価～政治参加教育～  
**メンバー** 北之迫、鳥羽野、工藤、北野、加藤、伊藤、井上、鈴木、村松、小澤、成、高木

## 1. 研究テーマの設定の理由

分教室では、卒業後の生活を想定して、自立と社会参加を目指す生徒に必要な学習内容を整理し、偏りのない3年間を見通したシラバスづくりに取り組んでいる。今年度から、全県立学校で「模擬投票」が実施された。在学中に有権者となる生徒もいる中、高等部段階での政治教育は必要なことである。この機会に分教室の『政治参加教育』の在り方を検討し、政治教育について系統性のある学習が積みかさねられていくようにこのテーマを設定し、研究していくこととした。

## 2. 研究方法

『政治参加教育』の授業は、学年ごとに行われる「総合」の授業で取り上げられている。総合の授業担当の教員を中心に、「総合」のシラバス作成を行うことを軸に研究を進めた。今年度、政治参加教育について各学年が行ってきた授業を持ち寄り、3年間の中でどの時期にどのような学習を行うことで、必要な力を身に付けられるか検討した。検討資料として、生徒へのアンケートによる振り返り、授業実践を通しての各担当による授業改善、生徒の反応を通した授業評価、日常生活の中での指導（朝のニュースに関するスピーチ等）を活用した。その結果を踏まえて、2年前に作成した「総合」のシラバスに、3年間の『政治参加教育』について追加することとした。

## 3. 研究の実際

模擬投票という具体的な取り組みを3学年共通の到達地点として、各学年の授業を持ち寄り、意見交換し、有権者となるまでの3年間の政治参加教育の積み重ねの概要をシラバスの中に取り入れることができた。

## 4. 研究成果と今後の課題

平成28年度よりシラバスの作成を通して、分教室での3年間の見通しを持った学習内容の整理を行ってきた。学年ごとに生徒の実態が異なり、取り扱うべき範囲が違うことも鑑み、明確な名称等ではなく大きな枠の中で授業を設定できるようにシラバスを作成している。今後も、作成したシラバスを授業計画に活用していくとともに、より実態に合わせた内容についていくために定期的なシラバスの見直しが課題となる。

	4月	5月	6月	7月(8月)	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年		遠足 携帯・スマホ安全 教室	進路校外 (特例)		金井祭	校内実習	鎌養祭	校外学習防災		G実習	
	・分教室のルール・授業中のルール ・熱中症 ・遠足事前(遠足を何月に入れるか) ・電車・バスのマナー ・清掃技能検定 ・思春期の心とからだ(R1追加) ・政治の基礎知識(R1追加)			・夏のエチ ケット ・金井祭発 表準備 ・清掃技能 検定	・金井祭 ・鎌養祭 ・防災・防災食作り・救急法・校外学習 ・環境問題について ・金井交流 ・理科体験出前教室(R1追加)				・茶道教室 ・3年を送る会準備 ・茶道教室(R1追加)		
2年		宿泊学習 携帯・スマホ安全 教室	現場実習	携帯・スマホ 安全教室	金井祭 進路校外 (福祉)	現場実習	鎌養祭		進路近隣校外 (Gホーム)	羽田校外学習	
	・宿泊学習 ・身だしなみと体のケア ・遠足事前 ・思春期の心とからだ(R1追加) ・国や社会の仕組みについて(R1追加) ・模擬選挙①(R1追加)			・夏休みの 過ごし方 ・金井祭発 表準備	・金井祭 ・鎌養祭 ・防災調べ学習、災害図上学習(R1追加) ・体調管理、怪我と病気の予防・対処法(R1追加) ・理科体験出前教室(R1追加)				・修学旅行 ・校外学習 ・茶道教室 ・3年生を送る会準備		
3年		修学旅行 携帯・スマホ安全 教室	現場実習 進路校外 (職安)	携帯・スマホ 安全教室	金井祭	現場実習	鎌養祭		進路校外 (支援センター)	遠足	卒業式
	・修学旅行 ・選挙について ・思春期の心とからだ(R1追加) ・18歳選挙権について(R1追加) ・選挙体験②(R1追加)			・金井祭発 表準備	・金井祭 ・鎌養祭 ・社会人としての責任(触法行為) ・余暇の計画 ・理科体験出前教室(R1追加)				・卒業式練習 ・金融教室 ・消費者教育 ・遠足 ・茶道教室(R1追加)		

【その他】過去に扱った授業

・神奈川県について

・話を聞くときに大切なこと

・名前がわからないものの説明(H30追加)



## あとがき

平成 28 年度からの 4 年間の教育計画に基づき、平成 28、29 年度のテーマは「自立と社会参加を目指した授業づくり」、そして、平成 30、31/令和元年度の研究テーマは「自立と社会参加を目指した、連続性のある授業づくり・授業改善」として取り組みました。

さて、今回の研究テーマの中にあるキーワードとして「授業改善」があります。その「授業改善」についてですが、特別支援学校においては、障害のある児童生徒が自己の持つ能力や可能性を最大限伸ばし、『生きる力』をはぐくむために、障害に基づく種々の困難を改善・克服するための教育活動を展開することが重要です。この教育活動の中心となるのが授業です。そこで、特別支援学校の教員は、個々の児童生徒の実態や教育的ニーズを十分に考慮して、専門性に基づいた授業改善を進める必要があります。そのためには、特別支援学校の教員は教材・教具の工夫や開発、研究授業の実施、研究授業後の研究協議会への参加、各種研修会の参加等を通して専門性を高めることが必要です。

そして今年度 8 月 7 日（水）鎌倉女子大学、鎌倉芸術館において、<2019 年度 第 56 回 関東甲越地区肢体不自由教育研究議会 神奈川大会>の主管校として、多くの教職員が運営に携わると同時に、研究協議会や講演会に積極的に参加しました。午前中、分科会の研究協議では、10 のテーマ（授業改善、学習指導、自立活動、情報教育・支援機器の活用、キャリア教育及び進路指導など）ごとの分科会に分かれ、1 都 8 県の代表校からの発表および協議が行われました。午後は記念講演として、「医療ケアを必要とする子どもと家族の生活を支える医療の現状」というテーマで、神奈川県立こども医療センター地域連携・家族支援局長 星野陸夫先生の講演があり、指導講評として、「肢体不自由教育学校に期待すること～新学習指導要領のスタート～」というテーマで、文部科学省 初等中等教育局 特別支援教育課特別支援教育官 菅野和彦先生から、新学習指導要領についてポイントを押さえたわかりやすいお話を頂きました。そして、1 都 8 県の代表校から 40 ものポスター発表があり、大変充実した研究協議会であったと思います。

今年度はこのような研修の機会を本校の多くの教職員が享受することができ、各々が自己研鑽研修などに取り組んだうえで、「日々の実践の充実」に向けて、校内研究に学校全体で取り組んでいます。これからも、テーマである「自立と社会参加を目指した、連続性のある授業づくり・授業改善」を推進するために、より一層研究を進める中で、教員としての知識、専門性を深め、具体的な実践から、一人ひとりの児童生徒の豊かさを育むものとして取り組んでいきたいと思います。

副校長 鈴木 健一郎

